



# 京鹿子集

豊田都峰選

斜め読みしてどこまでも枯野なり

龜岡 井上菜摘子

ふりかへらぬ子となり木の葉浴びてゐる

自画像や補助線にたす冬ひばり

次の波までの足あと雁渡る

藁塚へきてにこにここと年をとる

朱雀門色なき風のただ中に

京都 竹内 久子

僧正に父郷の訛菊日和

新蕎麦の汁の辛めや山日和

括られて白菜ぬくき息洩らす

パレットに山しほり出す紅葉晴

かはたれの底に月おく薄氷

東京 木山 杏理

父の忌の塩味決かす衣かつぎ

凍蝶の石のひとつに夢をみる

万葉の野をつれてくる吾亦紅

白鷺の喉すべりいる冬微光

登園児みな顔いつばいの白マスク

さま 神田 惣介

雨上がる朝立ち飾る菊の宿

駅弁に新酒も添へて改札へ

シニアは妻の先達紅葉道

忘年会銀座の路地に店探す



神麓集

醍醐寺 丹生をだまき  
桜木の紅葉し初めてうひうひし  
真言の寺苑なごませ薄紅葉  
白砂に苔で画く円枯れの色  
弘法の肉筆に遇ふもみぢ晴  
秋気澄む千年の塔屹立し

山田をがたま  
隻眼に慣れねど寒中見舞など  
癌告げ来し声耳朶にあり年送る  
己が癌告げ来し友はや寒星に  
寒に入り新たな治療に挑戦す  
寒晴れや今りハビリの正念場

宇都宮滴水氏追悼句 高木 智  
恒例の寒さとは言へ厳しかり  
生飯台は猫と同列寒雀  
生飯台へ餌を求め来る寒雀  
生飯台へ二十羽も寄る寒雀  
寒雀ことさら大いなる騒ぎ

芽吹き町 竹貫 示虹  
開花豫報からだのどこかむづむづす  
つくしんぼ早すぎたかと首かしげ  
陽炎や人を離れて人を戀ひ  
鳥雲にいつか身に憑く沖見癖  
芽吹き野や詩と死相似て切迫す

服部 郁史  
スーツ着て鏡の中の今朝の秋  
祭後の寡黙に戻る男下駄  
太秦に織塚一つ渡る鳥  
錦秋の京都の夜の蒔絵簞  
夜咄の薄灯の雨の姉小路

十二月八日 北川 孝子  
これよりの澄みゆくいのち野紺菊  
こゑ深まるほどの沸点濃紅葉  
あらためて己が齢数ふそぞる寒  
砂糖壺塩壺満たし冬用意  
十二月八日問はず語りの遠き日よ



枯木山 藤岡 紫水  
 光陰を押し出してゐる霜柱  
 寒牡丹剪ればあたりの翳も消え  
 風呂吹や手前味噌てふ味加減  
 白き炎の沖へ流れて浜焚火  
 風宿す音となりけり枯木山

船越 美喜  
 新しき白障子なり訪ね来て  
 手焙りにかざされし手の美しき  
 買物の数々ありて日短か  
 加茂川にゆりかもめ来て安堵せり  
 いつしかにとつぶり暮れて小夜しぐれ

西山 北村 香朗  
 業平の時空を超えし紅葉寺  
 塩竈あと注連新しく初冬の陽  
 業平の宝篋印塔散紅葉  
 鯉沢の池は名水紅葉濃し  
 濃紅葉や狗犬の座に鹿の坐る

喜寿の顔 禰寝 瓶史  
 木枯の宿りて私語を慎む木々  
 みそさざい庭の八隅の厄払ふ  
 枇杷の花壺に実生の夢うつゝ  
 喜寿の顔胎児視されて輝仁王  
 こう鶴に雪野展けて郷ごころ

林 日圓  
 春暁や安来生れの寛次郎  
 春昼の釉薬あまた研尋す  
 鉄辰砂草花図壺春の草  
 第一回創作陶磁春の昼  
 グランプリ輝く軌跡柿若葉

松田 都青  
 カトレアは迷宮に咲く王女とも  
 山河みな目覚めてをりぬ霜月夜  
 山覚の直らぬままの三島の忌  
 錯覚の直らぬままの三島の忌  
 火宅より火を消して来る報恩講  
 わが葬は蠟燭だけで足る霜夜

鈴鹿 仁

春待つ

字余りの水の音から冴返る

さよならの一意を抒めば凍返る

一番星炎ゆ山暮れの鬼やらひ

鬼やらひ闇裂く如し矛と盾

まらつどや春待つ杉のたかぶりに

---

近 詠

---

和田 照海

京の寂

惜しみつつ黄葉しぐれの遺髪塚

尼寺に比翼の句碑や藪柑子

鳳輦へ渡る高廊もみぢ寺

雪虫の探しあぐねて朝臣寺

塩竈を愛づるよすがのもみぢ墓

## 秀華採集

斜め読みしてどこまでも枯野なり

井上 菜摘子

斜め読みしても必要なことは繰り返し返されているので、絶対に「枯野」を読みこぼすことはない。いいものを持ち出したので、洒落た表現になった。

朱雀門色なき風のただ中に

竹内 久子

父の忌の塩味決かす衣かつぎ

木山 杏里

前句の「色なき風」の組み合わせが一段と華麗な色彩を醸し、後句の「塩味」に父へのそれなりの思いが絡まる。取り合わせを考えるとところに俳句表現の楽しみがある。

馬日とは六日やさしき瞳を思ふ  
葉を払ひ空をさそつてゐる枯木  
初寅や一日一山どよめけり  
御陵道寒日ますぐさそひゐる  
柏原の冬陽こんもり御陵の嵩  
掌を合はすなりの冬芽は宮どころ  
神水の御屋ふかぶかと寒木立  
冬の日のくまなきにある義民の碑

近詠

豊田都峰

灌響集 その七

初山河そのかなたなるわが山河  
初風の大湖今年の計とする  
神奈備をまん中にして初御空  
神奈備の拳ぐ日寒雲近づけず  
枯極む依代ひとしほ日を蒐む  
枯れの中ワケイカヅチの朱なる座





雪 雪 と 呼 び 捨 て ば か り 返 事 な し  
雪 が 消 え 笑 ひ 声 に も 色 が あ る  
ハ モ ニ カ と 四 温 ト ン ネ ル 抜 け 洗 心  
裸 並 木 で 音 楽 も ら す 対 向 車  
三 寒 に 結 ん で ひ ら き 洗 脳 す  
日 脚 の ぶ 鞆 の 中 で 小 銭 ふ え





近詠

三寒四温  
丸山佳子

世直しの波きらきらと節分湖

名のみ春枕ことばがうかび来ぬ

厄払ひ鳩の胸にも豆袋

春を待つ人に顔あり木に枝あり



# 京鹿子



昭和二十三年九月二十三日第三種郵便物認可  
平成二十三年三月一日発行  
通巻二〇二十七号四月一日發行

3月号